# ポスト社会主義モンゴル国における伝統の復興とエスニシティ
## ー カザフ人社会における二つの儀礼をめぐって ー

スヘー・バトトルガ

## 1　はじめに

本稿は、モンゴル国[1]におけるカザフ人の二つの儀礼—「ナウルズ」と「イヌワシ祭」—を事例としてとりあげ、ポスト社会主義モンゴル国における伝統の復興、マイノリティ社会の再編をエスニシティ問題として考察するという試みである。

本稿において、とくにカザフ人の儀礼「ナウルズ」と「イヌワシ祭」を取り上げる主な理由は二つあるといえる。その一つは、カザフ人は、モンゴルにおけるマイノリティの内で最も大きなエスニック集団であり、モンゴルにおけるエスニシティ問題において重要な要素だからである。もう一つは、この二つの儀礼にはカザフ人の伝統と文化の諸要素が凝縮されており、これらの儀礼を中心に彼らカザフ人の伝統が復活しているからである。

2006年は、モンゴル国にとって「大モンゴル建国800周年」にあたる意義深い年であった。「大モンゴル建国800周年」記念行事は、15年にわたって民主化・市場経済化を基本政策として進めてきたモンゴル国にとって、国民文化の再編・創出にとって重要な社会的意味を持つ。その背景には、90年代初頭に、社会主義体制から民主主義・市場経済体制へ移行するまでの、旧ソ連の「衛星国」つまり社会主義国家としての70年間の歴史がある。

---

1　本稿で「モンゴル」とは，特に指摘のないかぎり，1921年の人民革命以後のモンゴル人民共和国（人民共和国となったのは1924年）と現在のモンゴル国を指すこととする．

このような状況のなかで、国家の枠組みの中で固有の伝統と文化の特徴を生かしつつ、エスニック集団を再編し、急激な社会変化に対応していこうというのがカザフ人社会の動向であるといえる。

本稿では、こうした移行過程にあるポスト社会主義国家の中のマイノリティ社会における伝統の復活とエスニシティ再編の例をモンゴル国西部バヤンウルギー県のカザフ人社会に求め、考察したい。なお本稿は、2006年3月、8月から10月にかけて実施した現地調査の成果に基づいている。

## 2　大モンゴル建国800周年記念事業

モンゴル国政府は、2006年を「大モンゴル建国800周年記念年」として定めた。その意義について、記念事業実行委員会委員長でもあるM.エンフボルド首相が「2006年は、我々モンゴル人にとって記念すべき歴史的な一年です。モンゴル国、そしてモンゴル人が人類に成しえた貢献を再評価し、国連参加国やさまざまな諸機関に対して積極的にアピールすることで、記念すべき本年は全世界の知るところとなりました」と述べている。

1年間にわたって繰り広げられた事業の内容は多岐にわたるが、大きく、歴史的伝統を重視した記念事業と、伝統文化の継承・復活を観光開発と結びつけた記念事業との二つに分けることができる。

「歴史的伝統を重視した記念事業」は、全体として大モンゴル国を再現するという国家イデオロギーに関連したものである。モンゴル帝国時代に使われていたモンゴル文字、イフ・ザサグ（大法典）、ゲレゲ（許可状）、紙幣を復元し、政府機関に奉献する式典[2]、チンギス・ハーンの霊廟と政府迎賓館の建設、チンギス・ハーン、オゴディ・ハーン、フビライ・ハーンなどの記念碑・像の除幕式（一部完成）のほかに、「チンギス・ハーン情報データベース」、「モンゴ

2　2006年1月9日～13日，モンゴル文字アルファベットを教育文化科学省に，チンギスハーンのイフ・ザサグ（大法典）を法務内務省に，大クリルタイ（チンギスハーンの即位を決定した会議）が行われた黄金宮の模型を建設都市計画省に，ゲレゲ（ハーンが外交使節に発給した許可状）を外務省に，はじめての紙幣であったスフスを大蔵省に，大帝国の駅ネットワーク図を道路運輸観光省に奉献する式典が行われた．

ル国家儀式習慣とシンボル」プロモーション・イベント（4月10日と5月26）などがそれである。

「伝統文化の継承・復活を観光開発と結びつけた記念事業」は、さらに、国家レベルのものとエスニック・マイノリティに関するものとに分けられる。前者の国家レベルの記念事業の最大規模のイベントは、モンゴル最大の祭り「ナーダム祭」（7月11～12日）と「騎馬隊スペクタクル」（7月10日～8月31日）の二つである。

中央スタジアムで行われた「ナーダム祭」の開会式では、800人の馬頭琴演奏者、800人の長唄の歌手、800人の子供の体操が公演され、チンギス・ハーンを再現したパフォーマンスが繰り広げられた。

「騎馬隊スペクタクル」ショーは、大草原を舞台に2時間、モンゴル国防省の協力のもとで、500名の軍人を起用して、13世紀のモンゴル騎馬隊の華麗な勇姿を壮大なスケールのなかで再現するというものであった。その会場は博覧会の雰囲気に仕立てられ、お土産、料理、各種アトラクションなども展開された。国家事業として行われたこのプロジェクトには、モンゴルの民間企業のほかに電通、HIS, 伊藤忠商事、メデイアマーケットなどの外国系企業も参加した。

記念事業実行委員会が「モンゴルへ訪れる外国の観光客数は、毎年15～20%安定的に増加し、サービス分野の質も向上している。観光客数は年間30万人であるが、建国記念年2006年の際に、38万人を向かえる予定」だと発表しているように、モンゴル国政府は、観光産業の開発・発展を一つの大きな狙いとしている。政府は、観光産業の振興を国家経済政策の重点分野と位置づけているからである。

エスニック・マイノリティに関わる記念事業としては、カザフの正月「ナウルズ」、カザフ文化芸術祭（バヤンウルギー県、3月22日）、オイラートの「西モンゴル・ビエルゲー踊りの日」（オブス県、3月25日）、「アルタイ叙事詩とホーミーの祭り」（ホブド県、3月27日）、ブリヤートの円舞「ヨーホル・ナーダム」（ヘンティ県、6月10日）、トゥバの「ツァータン（トナカイ牧畜民）フェスティバル・シャーマン祭り」（フブスグル県、8月26日）などがそれである。これらの事業も、中央・地方の行政機構が主導し、または関与した。以下では、

マイノリティとしては最大のエスニック集団であるカザフの二つの行事、すなわちモンゴル西部のバヤンウルギー県における「ナウルズ」（正月）と「イヌワシ祭」を取りあげる。

## 3　カザフ人社会における伝統儀礼の復活

### 3-1　ナウルズ

モンゴルのカザフ人の人口は10万人に満たないが、モンゴルにおいては最大のマイノリティである。モンゴルの最西部に位置するバヤンウルギー県はカザフ人が住民の9割を占める[3]。カザフの多くは牧畜を営むが、農耕に従事する者もいる。モンゴルのカザフ人社会にはいくつかの祭りがある。ナウリズ(3月22日の旧正月)、クフテム（4月の春祭り)、トイ・メレケイ（7月のモンゴル・ナーダム祭)、エレジェプ・ウスタウ（9月の9日間の断食)、ラマダーン（10月～11月に当る断食月)、オラザ・アイト（12月の3日間の断食明け祭)、シネ・ジル（1月、西暦の新年)、クルバン・アイト（2月の3日間)、アイト・ナマズ（70日後に行われる犠牲祭）である。これらの祝祭のなかで、最大の祝祭は、正月・春祭り「ナウルズ」[4]である。

「ナウルズ」は、毎年春分の日（3月22日）に行われる。カザフ牧民にとって、太陽が活力を増しはじめる時期が一年のはじまりだからである。

カザフ人は、ナウルズの元旦（3月22日）に、まず「アクサカル」と呼ばれる長老の家に集って、冬の苦しみから解放され、大切な家畜が冬を越したことを喜び、互いの幸福を祈って新年・来春を祝賀する。「アカサカル」とは、「白

3　バヤンウルギー県の全人口は，2005年現在95758人・21328世帯で，そのほぼ9割がカザフ人である．モンゴル・アルタイ山脈の山地地帯に属しているため，全面積（45.700平方km）のおよそ9割以上が標高1600mの高さにある．カザフ人の生活の基本は5種類の家畜（ヤギ，羊，牛，馬，ラクダ）を中心とする牧畜産業である（2005年現在，全家畜頭数132万頭，牧民世帯数11242戸）が，ジャガイモなど野菜を作る農民もいる．

4　「ナウルズ」の「ナウ（naw)」は「新しい」，「ルズ（ruz)」は「日」を意味するペルシア語であり，本来，イスラム教以前のゾロアスター教による新年の祝祭に由来すると言われている．太陽が春分点を通過する春分の日に当たり，農事暦上重要であることから，イランを中心に広い地域で行われてきた．

い髭」という意味の言葉であるが、それが、家長、氏族の長、あるいは「ホト・アイル」（宿営地を共にする牧民グループ）の長に相当するリーダー的人物である。元旦には、豊かさを示す７種類の食材で作られた食べ物やヒツジ肉などを食べ、新たな１年間にこれらの食材に恵まれ続けるように祈る。そして「クォジェー」（肉を煮たときのスープにムギを入れて煮、ヨーグルトを加えて味付けをした料理・スープ）を食べる。「クォジェー」をたくさん食べれば食べるほど縁起が良いと考えられているからである。

まず2006年の春、3月20日～22日の３日間にわたって行われた「ナウルズ祭」について、記念式典と市民パレード、伝統儀礼の再現の二つに分けて記述したい。

〈記念式典と市民パレード〉

21日の午後６時、ウルギー市にある国立音楽ドラマ劇場で「ナウルズ祭・コンサート」と国家勲章受賞式が行われ、バヤンウルギー県知事をはじめとする県の要人、そして、モンゴル国科学文部省の文化担当をはじめとする政府関係者が出席した。

記念コンサートは、約１時間にわたって公演され、その内容は「アイトゥス」（民族歌謡）をはじめ、民族楽器ドンブラ・アンサンブルの演奏などカザフの伝統的芸術を代表するものであった。

コンサートの終了後、国の発展に貢献した人々に与えられる勲章の授賞式が行われた。「モンゴル政府は、モンゴル国および地域文化・芸能の発展に貢献したことを高く評価し、バヤンウルギー県音楽ドラマ劇場に対して３千万トゥグルグを援助として行うことを決定した。」と政府代表が挨拶した。つづいて受賞者（20人くらい）の名前が読まれ、国家勲章が授与された。受賞者らの代表によって政府・国家への感謝の言葉が述べられ、最後に記念撮影が行われた。

３月22日の午前10時頃、ウルギー市中央広場で「ナウルズ祝祭」記念式典と市民によるパレードが行われた。県知事庁の前に作られた舞台に県知事、政府要人、県及び市要人が登場し、政府要人の紹介と県知事による開会式の挨拶が行われた。

パレードには、国立音楽ドラマ劇場、役所、ウルギー市の各区、学校（カザフ、モンゴル、トルコ系）、警察署、赤十字、また民間会社が、それぞれ異なるテーマでパフォーマンスを披露し登場する。最初に、音楽ドラマ劇場がチンギス・ハーンとその騎馬隊を再現した。続いて、カザフ学校とモンゴル学校に通うカザフ人とモンゴル人の子供たちが、それぞれの民族衣装を身に着けて現われるほか、カザフ牧民の伝統儀礼や暮らしぶりが再現された。

40分間続いたパレードが終了すると、行事は再び舞台へと移った。県知事がカザフ語で合図すると、クルアーン（イスラームの啓典）が誦まれ、広場に集う人々が抱き合って「ナウルズ」の挨拶「アマンダス」を交わした。つづいて、舞台でドンブラ（カザフ民族楽器）演奏者50名と歌手による公演が30分間繰り広げられた。

〈伝統儀礼の再現〉

中央広場文化センターの前に建てられた7つのカザフ・ゲル（カザフ伝統の天幕）の中に、カザフ人細工師によって作られた馬やイヌワシの道具、伝統衣装、絨毯、ドンブラ楽器などアンティックな品物が展示され、また、伝統的な食べ物が置かれるなどカザフらしい雰囲気とカザフ牧民の暮らしぶりが上手に再現されている。

この7つのゲルの中で、住民たちがそれぞれ一つの伝統儀礼を再現し、演技した。その儀礼のテーマは「キズ・ウザトゥ」(花嫁を見送る)、「ケリン・トゥスィル」(花嫁を迎える)、「バラ・ブレウ」(赤ん坊を迎える)、「バラ・ホゥンダフ・タウ」(赤ん坊をゆりかごに寝かせる)、「スンデト・トイ」(割礼)、「トゥサウ・ケセル」(子供を歩かせる)、「アッテカ・ミッヒギズ」(子供を馬に乗せる）の7つである。各ゲルで披露されたこれらの儀礼は、全体的に「カザフ人の人生儀礼」というコンセプトを持っており、(自分がやっている儀礼のことを知らない人もいたが）儀礼の内容が再現された。

一つのゲルを一つのバグ（ウルギー・ソム（市）を構成する下位行政単位）が担当する。ゲル（儀礼）のテーマはウルギー市長によって決定される。ウル

ギー第9バグ長のサウレグッル氏は次のように語った。

> 我々カザフ人は、一時、カザフ習慣をすっかり忘れていた。それを再び復活させ、さらに後世代へ伝播させる目的がこの「ゲル」にある。各バグが中央広場でカザフ・ゲルを建て、それをカザフらしく飾り、上から与えられた一つのテーマ(儀礼)をゲルの中で演技しなければならない。評価のポイントは、どのバグが、最も伝統のある、カザフらしい雰囲気を作り出し、伝統と儀礼をより正確にかつ豊かに再現し、演出しているか、である。市役が経済的サポートしてくれる。今年（2006年）は、ゲルを運ぶのにかかる費用をガソリン代（10リットル分）として出してくれた。ナウルズ祭のように、イヌワシ祭の際にもゲルを建てる。しかし、今年のイヌワシ祭の際に経済的サポータがなかったので、4つのバグが共同で一つのゲルをやっと準備できた。(2006年10月、ウルギー市)

市要人と芸術関係者、民族者から構成される審査団が作られた。審査員はそれぞれのゲルを巡回し、どのゲルが良かったかを観察し、総合的に評点をつける。つまり、それぞれの「ゲル」は、飾りや展示品の価値、儀礼の演技などで、互いに競争するのである。

これらの事業のほかに、3月20日～21日にかけて、カザフの様々な伝統的娯楽・競技が行われた。ウルギー市郊外の草原で行われた「キズキャル」の競走と「ジャルガ・ジャリス」[5]の二種類の騎馬レース、「コックバル・タルトゥー」(騎馬ゲームの一種・羊奪い争い)[6]など馬の競技、「ブルキッテシレル・サィウィ

5 「キズキャル」は長距離（25キロ）の一般的な騎馬競走である．一方「ジャルガ・ジャリス」は側対歩による競走である．側対歩とは，同じ側の前脚と後脚を同時に前に出す足歩法．揺れが少ないので馬乗者の疲労が少ない．距離は2～10キロ．側対歩ができるかどうかは遺伝によって決まるが，この歩法は柔らかくリズミカルなので側対歩のできる馬は高い価値があるとされ，カザフ人はこのような馬を祭りの際に好んで乗る．

6 「コックバル・タルトゥー」は，「ヤギ争い」として知られる騎馬競技の一種である．2人が馬に乗って行う個人戦と，村や氏族を代表して2つのチームによって行われる団体戦の2種類があり，かつての団体戦には千人近い騎手が参加することがあった，という．現在，バヤンウルギーで実際に行われているのは，前者の個人戦のみであり，

ス」(イヌワシ狩)、(筆者は実際にみていないが、)サグサイ村で「アイトゥイス」[7]歌合戦が行われた。

また、伝統スポーツ大会—相撲（モンゴル民族相撲とカザフ・レスリング)、「サダク・アトゥ」弓矢大会、「ホラル」「アスィクオインダリ」（ヒツジの踝骨を使ったゲーム)、「トゴスマライク」ゲーム—も行われた。近代的な催しものもいくつかあった。「ムシャイラ」詩人コンテスト、「ナウリズ・アル」ミス・コンテスト、ディスコ・ショーがその例である。

### 3-2 「鷹狩り」伝統の復興とイヌワシ・フェスティバル

(1) イヌワシ・フェスティバル

バヤンウルギー県のカザフ人社会では「ブルゲット」（イヌワシ）を自由自在に操り、狩を行う伝統があり、2000年以来、毎年の10月第1週土曜日に「ブルゲッチディーン・バヤル」（イヌワシ・フェスティバル）が行われている。

カザフ牧民は、昔からイヌワシを使い野ウサギ、キツネ、オオカミなどを獲って狩りをしてきた。このイヌワシを使った狩猟は「ブルゲチレル・サィウィス」と言われる。狩りは、ヒナを捕獲し、イヌワシをまるで家族のように育み、そして鷹匠とイヌワシの信頼関係によって行われた。鷹狩りの妙技は雪で覆われたアルタイ山脈の高山の上で磨かれたと信じられている。

今も、カザフ人は、鳥羽を帽子につけたり、羽や爪を子供の服につけたり、

---

カザフ人の結婚式の際にもよく行われる．男たちはヤギの毛皮（昔は生きたままのヤギ）を奪い合い，それを設置されたゴールに投げ込むのがルールである．(カザフスタン産業貿易商・エクスポ2005パンフレット)．

7 「アイトゥイス」は，吟唱詩人たちによる一種の歌合戦で，カザフ人の音楽芸術を代表する伝統的な民族口承詩の一つである．「アイトゥイス」の起源は古く，儀式や生活の中の慣習として，若い娘と馬乗りが互いに歌い交わしたことが元になっていて，それが後に，アクィン（吟遊詩人）たちによる歌合戦に発展した．「アイトゥイス」の歌は，とてもダイナミックで，スピードと機知，そして即興の技術が必要とされる．唄い手たちは，ドンブラを弾きながらこうした歌を吟じてゆく．歌合戦に参加するアクィン（吟唱詩人）は，予想もしないような問いに対して，すぐに機転をきかせて答え相手の突っ込みに反撃しなくてはならない．この争いではより，才気にあふれ，内容の濃い言葉を繰り出すことのできたアクィンの方が勝ちである．ナウルズの際に繰り広げられる「アイトゥイス」は，冬と春との戦いを象徴しているという．

新婚夫婦のベッドの所に飾ったり、また、男の子に狩猟用の鳥を贈ったりする習慣がある。カザフ人にとって、イヌワシは、力と広大さ、洞察力を象徴しており、悪いモノは近づけない、イヌワシが送られた男子は強くて勇敢な騎手になれる、と考えられたからである。カザフ牧民にとってイヌワシとは「仲間であり、家族である。そして、生活の一部であり、祖先が残してくれた文化遺産、伝統そのもの、カザフ人の誇り」なのである。

こうした日ごろの狩りの腕を披露するのがこのイヌワシ・フェスティバルである。2006年の秋も、9月30日と10月1日の2日間にわたって行われた。

イヌワシ・フェスティバルは、二つの事業から構成される。イヌワシ・フェスティバル・パレードとイヌワシ競技である。パレードは、ウルギー市中央広場で行われ、一方、イヌワシ競技大会は、ボガト村（ソム）のホブド川沿いのサヤット山麓の広いステップ（ウルギー市中心から東南10キロ）で行われた。鷹匠やカザフ人の男たちは、力と器用さを競い、イヌワシ狩りの腕を競い合う競技2種目と、カザフ伝統の馬を使った競技3種目、競馬で競った。以下、筆者が現地で観察したイヌワシ・フェスティバルを記述し、検討する。

〈イヌワシ・フェスティバル記念行事〉

1日目（9月30日、午前10～12時）パレード

ウルギー市の中央広場で記念パレードが行われる。最初に各村（ソム）から集まったおよそ50名の鷹匠がイヌワシを腕に乗せて登場する。鷹匠たちは、馬に乗り、家畜の毛皮で作ったコート、キツネの毛皮で作った帽子をかぶっており、鉄砲を背負う鷹匠もいる。また、「ナウルズ」のように、広場では7つのカザフ・ゲルが建てられており、その中でカザフ人女性が作った手作りグッズや絨毯などが展示され、そして売られる。2年前から、このようにゲルを建てるようになったという。

同日（午後13～18時）イヌワシ競技と他の伝統競技

ボガト村サヤット山の谷でイヌワシや馬を使った伝統競技が行われた。それらを順番に記述すると次のようになる。

最初に行われたのは、イヌワシ呼び寄せを勝負する「シャカッロウ」という

競技である。丘の上からイヌワシを放し、馬上の主人の腕に辿り着くか、そのスピードを競うというものである。鷹匠は馬に乗りながらイヌワシを操る。

続いて、「テンゲ・イルゥー」と呼ばれる競技が行われた。騎手は馬に乗って全力で走りながら地面に落ちている6つのコインを馬上から身を乗り出して拾い上げ、その正確さとスピードを競うというものである。

次に行われたのが、一定距離のコースを設定して行われる「カズグアル」（娘追いという意味）と呼ばれる伝統競技である。この競技には、娘と馬乗りの名手が一人ずつペアになって参加する。馬に乗った娘が先にスタートし、男がこれを追いかけるというもので、ゴールにたどりづくまでに男が娘に追いつくことができれば彼女を抱きしめてキスすることが許されるという。この競走には6組が参加した。

2日目（10月1日、10～18時）

最初に行われたのが「ショルガ」という競技である。丘の上からイヌワシを放し、麓にいる馬上の鷹匠が引きずる獲物・キツネ皮に何秒で辿り着くかを競うというものである。これは、カザフ族の鷹匠がイヌワシを訓練するための典型的な競技でもある。

次に「コックパル・タルトゥー」と呼ばれる伝統競技が行われた。馬上の2人がヤギの毛皮を力ずくで奪い合う。勝負がつくまで荒らしく延々と続くこの競技には観客も興奮していた。この競技に24名の男が参加し、ノゴーン・ノール村の参加者が優勝した。

これらの競技が終了し、最後に、生きたキツネや幼いオオカミを野に放し、複数のイヌワシに襲わせるというアトラクションがあった。

イヌワシ・フェスティバルには、全部で51名が参加した。6名の審査員（イヌワシ協会会長、イヌワシ研究者、新聞記者、役人、博物館館長、共同組合代表ら）が、競技ごとに点数をつけ、最も優れた鷹匠や村のチームを決めた。評価のポイントとは次の3つである。

1．イヌワシ、馬、鷹匠のコーディネート・バランス、調和の良さ（鷹匠の衣装、イヌワシと馬の道具）

2．イヌワシと鷹匠との信頼関係（イヌワシが主人の腕に戻れるか）

3．鷹匠のイヌワシを操る技術

本フェスティバルでは、アルタイ村の鷹匠たちが優勝し、表彰された。閉会式に、モンゴル観光協会副会長が、「カザフ人の伝統文化であるイヌワシ・フェスティバルを成功させた」と述べ、主催者であるモンゴル・イヌワシ協会にモンゴル観光協会から表彰状が送られた。

(2) イヌワシ文化の保護とモンゴル・イヌワシ協会

第1回のイヌワシ・フェスティバルは、2000年10月6日、バヤンウルギー県ボガット・ソムのハル・トルゴイ（サヤト山）というところで行われ、各村（ソム）より5名、全部で60名の鷹匠が参加した。1960年にウルギー市で行われた鷹匠県会議・イヌワシ祭、そして、1963年に首都ウラーンバートル市で開催されたイヌワシ・アトラクション以来のことであった。

同時に、Z. カズベック氏（アルタイ・トゥル社社長）、H. アデルハン氏（同社マネージャ）、S. メデウハン氏（オルマン・アン株式会社社長）の3人を代表とするモンゴル・イヌワシ協会（Burgedchidiin Kholboo）及び「ブルゲットチン（鷹匠）基金」が設立され、参加者60名の鷹匠が当協会会員となった。その際に優れた鷹匠の選考規則も作られた。

「モンゴル国の少数民族カザフ人民のイヌワシを使って狩りをする伝統と文化、習慣を復活させ、それを若い世代に継続させ、（モンゴル）国民及び外国に宣伝する、全鷹匠の協力によって鷹匠たちの権益を守る」（モンゴル・イヌワシ協会の規則）ことがモンゴル・イヌワシ協会の主な目的である。現在、モンゴル・イヌワシ協会は、約400人の鷹匠会員を持ち、さらに、イヌワシ文化の伝承や適正なイヌワシ飼育のための講習会を定期的に開催しているという。イヌワシ協会の創設者カズベック氏は次のように述べている。

> カザフの人民は、猛獣や鳥を捕まえて訓練させ、それを使って狩りをする伝統を持っていた。長老たちは、以前、イヌワシだけではなく、鷹やはやぶさなどをも狩りに使っていた。1960年、ウルギー市で鷹匠たちの全県会議が開かれたが、その後、キツネ病の流行などが原因で（イ

ヌワシを使っての）キツネ狩りは禁止された。この伝統は、忘れられつつあった。だが、我々の活動によってイヌワシ文化は再び復活する。イヌワシ狩りは、モンゴルのカザフ人のみならず、他国においても注目されはじめている。

第1回のイヌワシ・フェスティバルは、2000年1月24日に開かれたバヤンウルギー県市民代表会議委員会の決議によって実施された。だが、実際に「イヌワシ・フェスティバル」開催権を所有しているのは観光会社の「Altai Tur」「NOMADIC」2社である。前者は、1996年に設立された地元バヤンウルギー県の民間会社で、この会社の社長とマネージャーがイヌワシ協会のトップを勤めている。後者は、ウラーンバートル市に本社を持つアメリカ系の民間会社で、イヌワシ・フェスティバルのスポンサーである。イヌワシ・フェスティバルを見に訪れる外国人の観光客はほとんど「NOMADIC」社のお客であるという。

イヌワシ協会会長はイヌワシ・フェスティバルについて次のように述べた。

今年（2006年）、7年目のイヌワシ・フェスティバルが行われた。それまでに、全部で鷹匠44名に対して「優秀で名誉なる鷹匠」、経済的支援をしてくれた2人の外国の方に「名誉なる鷹匠」称号とメダルを授与した。また、毎年、1名の優秀な鷹匠を選び、表彰している。

今年、97人の外国人観光客が訪れ、イヌワシ狩りやイヌワシ祭を見学した。また、バヤンウルギー県知事、我がモンゴル・イヌワシ協会、モンゴル観光協会が協力契約を結んだ。今後、フェスティバルを拡大化し、一つの国民的祝祭になるよう活動していきたい。そして、イヌワシだけではなく、コックパル（ヤギ奪い）、ジャンバトゥ（弓矢）などカザフの伝統競技も広めたい。去年からウリアンハイ人（バヤンウルギー県に住むエスニック集団の一つ）の伝統弓矢も取り入れて紹介している。

(3) 二つのフェスティバルと観光

モンゴル・イヌワシ協会が主催するイヌワシ・フェスティバルのほかに、「サ

ラン・イヌワシ協会」が主催する「アルタイ・イヌワシ・フェスティバル」というものがある。「サラン・イヌワシ協会」は2004年に設立され、それ以来、毎年「アルタイ・イヌワシ・フェスティバル」をウルギー中心から90キロメートル離れたサグサイ村（ソム）で行っている。

サグサイ・ソム長ボラット氏の話によると、その主な目的は「観光を利用して村の住民たちの生活水準を改善することと、職場の提供だ」という。つまり、村と民間会社が協力し合って、外国人観光客を呼び寄せ、村をあげてさまざまなサービス（イヌワシ・フェスティバル見学、自然体験、ツーリスト・キャンプ宿泊、乗馬、伝統儀礼の見学、伝統製品・お土産など）を提供することで村全体の生活状況を改善していこう、というのである。

サグサイ村のフェスティバルを見に訪れる外国人観光客は、17名（2004年）から56名（2006年、13カ国）にまで増えた。そして2006年、国連人口基金が行った調査によって、チンギス・ハーンの誕生地ヘンティ県ダダル村とこのサグサイ村の2村が「市民による観光開発の可能性が高い村」として選ばれた。地元サグサイ村の「フフ・チノ（青い狼）」という観光会社がスポンサーとなっており、英語のガイドブックを出版するなど観光客を呼び寄せるため宣伝に力を入れているようである。

ところが、モンゴル・イヌワシ協会は「我々が（イヌワシ・フェスティバルの）特権を所有している」と主張しており、モンゴル観光協会は「別々でやるのは好ましくない。我々も様子を見て協力するか判断しょうと決めた。今年は、一応モンゴル・イヌワシ協会と協力協定を結んだが、今後、フェステェバルを共同で主催するよう説得していきたい」との見方を示す。これらに対して、サグサイ・ソム（村）のソム長は次のように述べた。

> サグサイ村には27人もの鷹匠がいるので、村だけでフェスティバルを開催することは十分可能だ。(2協会)共同でやろうという意見もある。しかし、伝統というものは、様々な手段や意見によって継続され、拡大化しなければならない。競争があってこそ、意味があり、発展できると確信している。

このように、バヤンウルギー県で2003年以後、毎年、2つのイヌワシ・フェスティバルが同時に行われており、「イヌワシ文化」をめぐる地元の2つの協会による微妙な対立も生じるようになったのである。その背景には、国家による観光開発政策と、地元の協会らによる観光市場の確保をめぐる競争がある。

「ナウルズ」（旧正月）は、内部（地元のカザフ人自身）によって復活しているのに対して、「イヌワシ・フェスティバル」は、外部（モンゴル人・観光会社、外国人らによる協力、支援など）の影響が多く、内部と外部との相互作用によって復活しているのである。

## 4　国民文化の再編・創出とエスニシティ—社会主義から民主主義へ—

### 4-1　社会主義における民族芸能

モンゴルは、1911年に独立を宣言したが、その後独立を失い、最終的に勝ち取ったのは1921年になってからである。第2の社会主義国家となったモンゴルの最大の課題は、マルクス＝レーニン主義を国の基礎的な指針とした社会主義国家の建設、社会主義的国民文化の創造であった。つまり、社会主義期における文化政策は、コミンテルン（共産主義第三インターナショナル）の直接的指導による、国民の「兄弟的友情と人民の完全な平等」を基本的なイデオロギーとした「新しい」民族・国民文化の創造であった。

社会主義期における「国民」とは「社会主義的モンゴル民族（ウンデステン）」を意味し、「国民文化」とは「形式的に民族的、内容的に社会主義的、特性的に国際主義的（共産主義的）」なものでなければならないとされた。1959年、ネグデル化[8]の勝利宣言によって、モンゴルの社会主義化は本格化した。

少数民族の芸能文化が奨励され、各県に国立劇場が設立され、とくに少数民族が集中している西モンゴルの芸能文化—ホブド県の「ホゥーミー」、ウブス県の「ビェルゲー」（舞踊）、バヤンウルギー県の「アイトゥス」などを含む—が地域の文化アイデンティティとして発展していった。

8　ネグデル（共同組合）化運動とは，家畜を共同所有化した，牧畜の集団化のこと．

「芸能は、ラジオの時代[9]が始まるよりも前から、モンゴル国家建設と深く結びついていたし、1921年の人民革命当時、モンゴル語の識字率が0.7%だったモンゴルでは、文字媒体によって革命思想を宣伝することは出来なかった」（上村明　参考資料　2000）のである。つまり、「芸能」は、モンゴル及びその少数民族に社会主義思想を普及させるために重要な役割を担ったのであった。

ところが、1990年以後、モンゴルで民主化運動が進展する。1992年2月発効の新憲法で、マルクス・レーニン主義の放棄、「モンゴル国」への国名の変更や私有財産・市場経済の保障などが規定される。国名の変更は1911年の「モンゴル国」再興を意味し、国家と国民文化の基本原則―人権、自由、正義、民族統一の尊重、歴史、文化伝統の継続、そして、人道的かつ人民中心の民主的社会の構築と発展―が新憲法前文に国是として制定される。

無信仰教育、伝統儀礼の中断など規制が多かったかつての「形式的に民族的、内容的に社会主義的」国民文化が、「新しい」原則に基づいて「形式的にも内容的にも民族的」文化へと変化したのである。

このように、社会主義期に成育された「芸能（文化）」が、現在における伝統の復活に多いに役立っているのである。

## 4-2　カザフ人社会をめぐるエスニック関係

ナショナリズムが高揚し、民族文化が復活していく過程で、もう一つの問題が突出して現れた。それは、西モンゴルにおけるエスニック関係をめぐる問題である。

モンゴル国には20余りのエスニック集団があるが、大きく、モンゴル系とチュルク系の2つに分類できる。さらに、モンゴル系エスニック集団は「東モンゴル（主にハルハ）」と「西モンゴル（オイラート）」の2つに分かれる。

「東モンゴル」を代表する「ハルハ」は、モンゴル全人口のおよそ8割以上（84%）を占め、東部・中央地域を含む広い居住地を所有する。それに対して「西モンゴル」の「オイラート」と呼ばれるモンゴル系エスニック集団とチュ

9　1931年，モンゴルラジオ設立，1967年，テレビ放送開始.

ルク系エスニック集団は、全人口のおよそ16%を占め、西部地域（西モンゴル）を居住地として集中する[10]。

西モンゴルのバヤンウルギー県は、チュルク系カザフ人が圧倒的に多い（2000年現在、県人口の88.7%）ため、実際、カザフ人の文化的（自治的）領域となっている。

**バヤンウルギー県におけるエスニック集団（1989、2000年現在）**

| エスニック集団 | 1989 | % | 2000 | % |
|---|---|---|---|---|
| カザフ | 82750 | 91.0 | 80776 | 88.7 |
| ウリアンハイ | 5100 | 5.6 | 6528 | 7.2 |
| ドゥルベッド | 1382 | 1.5 | 1397 | 1.5 |
| トゥバ | 737 | 0.8 | 1626 | 1.8 |
| ハルハ | 393 | 0.4 | 403 | 0.4 |
| その他 | 455 | | 284 | |
| 全人口 * | 90911 | 100.0 | 91068 | 100.0 |

註：Mongol Ulsiin Undesnii Statistikiin gazar, *Bayan-Ulgii aimgiin toollogiin dun*（Ulaanbaatar 2001）.（*）モンゴル国籍を有しない外国人を含む。

バヤンウルギー県が設立された1940年当時、県全人口に占めるカザフ人とウリアンハイ人の割合はほぼ同じだったという。しかし、その後のウリアンハイ人などカザフ人以外のエスニック集団が県外に移住し、カザフ人口の増加などによって、現在は、カザフ人以外のエスニック集団は県全人口のおよそ10%しか占めていない。カザフ化が進み、その一方、ウリアンハイなどカザフ人以外のエスニック集団がマイノリティ化していったのである[11]。

10　18世紀後半には，東部のハルハ・モンゴルと西部のエスニック・グループの地理的位置はほぼ現在の位置に定められた（H.Nyambuu 1992:59-60）西モンゴル（ウブス，ホブド，バヤンウルギー県）の人口構成は次のとおりである．①オイラート系エスニック集団：主にホブド県，ウブス県，バヤンウルギー県に居住；②ハルハ・モンゴル系エスニック集団：主にホブド県中心（ホブド市），ウブス県東部に居住；③チュルク系エスニック集団：主にバヤンウルギー県とホブド県西部のホブド・ソム（ムスリム・カザフ人），ウブス県タリアラン・ソム（ムスリム・ホトン人）に居住；その他，少数のウリアンハイ，トゥバ，少数のウイグル人がいる．

11　カザフ以外のエスニック集団が多いソム（村）としては，ツェンゲル村の18.6%が

## 4-3 「モンゴル国」の再編とエスニシティの変動

モンゴル国のエスニシティは、Undesten（ウンデステン）と Yastan（ヤスタン）という言葉で公的に表明されているが、民主化以前、「ハルハ」以外のエスニック集団は「ヤスタン」として扱われてきた。

社会主義時期のモンゴルにおいては、最大の課題は「形式的には民族的、内容的には社会主義的、特徴的にはインターナショナル的」たる一つの民族 "Sotsialist Mongol Undesten"（社会主義的モンゴル民族）の形成であった。(Badamhatan.S　1980（1973）:17-21)

藤井麻湖氏（1998）も指摘するように、「社会主義時代には、ある特定のエスニック集団（ヤスタン）が他のエスニック集団より突出するような動きを抑制するメカニズムが働いていたと考えることができる」。

つまり、多数のエスニック集団（ヤスタン）から構成される一つの Mongol Undesten（モンゴル民族）が形成されていく過程で、いわゆる「民族問題はマルクス主義的レーニン主義的理論に基づき、徹底的に解決された」として結論づけられたのである。(Badamhatan.S　1980（1973）:17-21)

ところが、1990 年代以後の民主化に伴って、モンゴル西部の複数のエスニック集団（ヤスタン）において伝統の復活が突出して現れたことは注目すべきである。それは、現在のモンゴル国のエスニシティを理解する上で、それらエスニック集団（ヤスタン）の伝統復活とモンゴル族のそれとの間にどのような関係があるかを検討することは重要だからである。

民主化以後、バヤンウルギー県にウリアンハイ同盟、トゥバ民族を救う臨時委員会、ウリアンハイ・ドゥルベッド・トゥバの臨時連合、カザフ言語文化協会、ムスリム協会、カザフ友好協会、オイラート人の利権を守る連合、オイラート連盟、ウリアンハイ・ドゥルベッド・トゥバ人の社会支援を行う連盟など、エスニック集団（ヤスタン）による団体が相次いで設立した。とくに、1990 年代初頭、モンゴル西部のカザフ人とウリアンハイ人などをめぐる一連の新聞

---

トゥバ人（チュルク系），アルタイ村の 33.9%，ボヤント村の 51.0%，ボルガン村の 19.1%がそれぞれウリアンハイ人（モンゴル系）である．(*Bayan-Ulgii* 2001)

記事が話題となった。当時、カザフ民族統一運動がモンゴル国国民大会議に提出した要求は次の6点である[12]。①モンゴルにいるカザフ人をUndesten（民族）と制定すること、②バヤンウルギー県に対して自治権を与えること、③モンゴル全人口に占めるカザフ人口の割合に対して国会議席数を与えること、④副大統領に、バヤンウルギー県からカザフ民族の代表を補選すること、⑤カザフ語を公用語として認めること、⑥新憲法制定の際に、カザフ人3人～4人を参加させること。また、カザフ民族の統一運動において、以下のような主張が述べられた（Islam, H.　2000）。

今までに（略）一方的な国家政策によって、伝統が脅かされてきた。宗教信仰、習慣において、タブーとなっていたタバコや飲酒などそのもの自体についてほとんど知らなかったカザフたちはたった40年余りの間に、そのような良い習慣を失い、今だに復活させることができない状況だ。これは、かつての民族の聖なる伝統が無視されてきたことに関係している。

バヤンウルギー県以外に、ウラーンバートル市、ナライフ市、シャリーン・ゴル、ベルヒーン・オールハイなどの地方・都市部におよそ46000人のカザフ人が居住している。しかし、彼らの民族文化の発展と母語による教育は不充分である。

カザフ・インテリゲンチャに対する国家の支援、カザフ人の政府関係の機関への採用が行われず、カザフ人に対する信頼がなくなりつつある。

近年、政府のバヤンウルギー県への支援、関心が充分ではない、また、カザフスタンと西部地域との交流、カザフスタンからの投資は支援されていないことが事実である。

カザフスタンのカザフ化政策によりカザフスタンへの移住者が急増したことに関連し、カザフ民族の支援センターの設立が国会で提案された[13]。その際

12　Kazakh Undestnii ev negdliin hudulguun（カザフ民族統一運動）1990より

13　2000年9月7日，チュルク・モンゴル研究国際センター，Kazakh Undestnii

の主張は以下のようなものであった（Islam, H. 2000）。

1990～92年に、6万人余りのカザフ人がカザフスタンへ両国間労働契約によって移住している。その内3980人がモンゴル国籍を変え、カザフスタンに定住し、およそ15000人が私費で戻ってきた。5万人ぐらいのカザフ人は、どの国にも所属されず、政治、経済、人権上の犠牲者になっている。情報制度が整備されていないため、実際、何人のカザフ人移住者がカザフスタンにいるのか、不明である。

現在、バヤンウルギー県に、カザフ人以外のエスニック集団として約9900人のウリアンハイ人、ドゥルベッド人、トゥバ人、ハルハ人がいる。彼らは「モンゴル人」と呼ばれている。カザフ人の主張に対して、彼ら「モンゴル人」は、彼らの立場が脅かされているとし、次のように主張する。

我が政府はカザフ、ウリアンハイ人民の民族的特徴に注意を払い、その結果、1940年にバヤンウルギー県が作られた。ところが、その際から、カザフたちは、「モンゴル系の人々」を侮辱するようになり、さらに、（我々モンゴル人に）ほかの県や地域へ移住することを勧めるようになった。

我々が小学生だった頃、ウルギー市にあったモンゴル語学校の生徒は1000人で、その内のおよそ8割がモンゴル人だった。ところが、今、モンゴル人は2割しか占めていない。そのゆえ、たった一つのモンゴル学校を閉校して、代わりにカザフ学校を作ろうという意見もカザフ人によって出されるようになった。

近年、多数者であるカザフ民族の慣習、言語文化を発展させるためとして、全ての芸能・文化活動は、カザフ語で行われるようになった。また、県のラジオもカザフ語で報道されている。これは当然のことではあるが、しかし、少数派である我がウリアンハイ、ドゥルベッド、トゥバたちは、

---

Zuvlulduh Zuvlul（カザフ民族協議委員会），カザフ人国会議員3名（R. サンダルハン，O. ニガメト，H. ジェケイ）によって，モンゴル国大会議に提出された決議案.

このままで良いか、どんなラジオを聞き、自分らの民族文化をどのように発展させていけば良いのか（Chuluunbaatar, S.　Onjoon, Sh.　1990）。

バヤンルギ―県に住むウリアンハイ人によると、カザフ人とウリアンハイ人との間に、家地や草刈地の所有をめぐってたまたま紛争がおこるという。民主化以後のモンゴル西部におけるエスニック関係の背景には、「県人口の１割しか占めていない「少数民族のなかの少数民族」の問題がある」とモンゴル系住民社会促進連盟会頭のバトスフ氏が指摘する。

## 5　おわりに

1990年代以降、モンゴルは、社会主義体制から民主主義体制へと大きく変化しつつある。移行過程にあるモンゴル国にとって最大の課題は、新しい国民国家の再編と統合、国民文化の創造である。

現在、モンゴルのカザフ伝統文化の復興現象においては、イスラーム信仰の復興がベースとして存在する。本稿で取り上げた二つの儀礼「ナウルズ祭」と「イヌワシ・フェスティバル」の再編・創出はその信仰の復興と関連して起こっている。特に、この二つの伝統祝祭は、カザフ人自身に伝統の学び場、そして、伝統の再発見と発展の機会を提供している。カザフ人たちは、「カザフらしさ」たる伝統をさまざまな形で再現することによって、民族アイデンティティを再確認している。その意味では、「ナウルズ祭」と「イヌワシ・フェスティバル」という２つの伝統祝祭は、カザフ人の伝統・文化の諸要素を融合しており、モンゴルのカザフ人の民族・文化アイデンティティを象徴する民族儀礼なのである。

カザフ人の伝統文化の復興には、外部との交流という要因も大きい。特に、外国の投資、観光会社の協力によって行われるようになった二つの「イヌワシ・フェスティバル」の場合はそうである。このイヌワシ・フェスティバルをめぐる観光客の確保のための競争が、カザフ伝統の活性化に大きな刺激となっている。このように、観光は、カザフ伝統文化の復活に大きく関係するようになり、

それによって、カザフ伝統文化は、モンゴル伝統文化を商品とする観光の重要な一要素ともなり、カザフ人だけのモノではなくなりつつあるといえる。その背景にあるのは、観光を重要産業として開発しょうとするモンゴルの国家政策がある。

田中克彦（2000年）氏も指摘するように、モンゴルで「優遇されてきた」カザフ人社会は、ほかのエスニック集団と比べると、現在も、そのような立場が維持されているように見て取れる。その背景には、モンゴルとカザフスタンとの関係がある。モンゴルは、カザフスタンを経済的パートナーシップとして位置づけており、そこで、カザフ族の一部であるモンゴル西部のカザフ人への待遇対策が重要な要素となっているのである。

筆者は、以前、モンゴルのカザフ人によるカザフスタンへの移住について論じた（バトトルガ　2002, 2003, 2004）。この移住は、1991年に独立したカザフスタンが、人口構成と文化の両面でカザフ化を進めるため、モンゴルのカザフ人を優遇して迎えるという政策を取ったことに起因している。社会体制における急激な変化、市場経済化といった大きな背景を持っており、この移住に関する諸問題が未解決のままである。カザフに一旦は移住したが問題を抱えてモンゴルへ戻ってくるカザフ人たちが少なくない。その社会保障、貧困などを含む移住問題を、どのように解決していくのか、カザフスタンとどのような形で協力していくべきか、モンゴルが直面する問題の一つでもある。

一方、カザフスタンとモンゴルとの国境を越えるカザフ人の移動によって、文化も移動・伝達する。モンゴルから移住したカザフ人たちは、かつてロシア化していたカザフスタンでカザフ伝統の復活に貢献し、また、カザフスタンからモンゴルへ来るカザフ人たちによって運ばれる新しい文化が「ナウルズ」などの祝祭を通して浸透していくのである。一時、移住によって弱体化しつつあったバヤンウルギー県のカザフ人社会は、このような文化的交流と相互作用によって、文化的には活性化の方向で再編されつつあるといえる。

ところで、モンゴルは、社会主義時代には解決されたと信じられていたエスニシティの問題を抱えている。それは、モンゴル西部のエスニック関係をめぐる問題であり、特にバヤンウルギー県のカザフ人とそれ以外のエスニック集団

（ウリアンハイ、ドゥルベッド、トゥバなど）との間に一種の緊張関係が顕在化してきたことである。

その背景にある要素の一つは、モンゴル西部及びバヤンウルギー県におけるカザフ化をめぐる問題である。社会主義期には、「一つのウンデステン（Undesten, 民族）と多数のヤスタン（Yastan, カザフを含むエスニック集団）」という言説でモンゴル国内部のエスニック関係が表面上は統合されていた。民主化後は、それが「二つのUndesten（民族）、多数のYastan」というエスニック構造へと変わった。つまり、カザフ人はハルハ（主要なモンゴル族）と並ぶ「ウンデステン」になったのである。これには、カザフスタンの独立も影響したのではないだろうか。このような社会的背景が、「ウンデステン」としてのカザフ人社会の再編と伝統の復活を強化する要素になっているのである。

しかし、バヤンウルギー県の少数民族としての「モンゴル人（モンゴル系諸エスニック集団）」にとって見れば、彼らがこの問題を「少数民族のなかの少数民族の問題」として解釈しているように、深刻な状況となっている。そうした状況に対応し、諸エスニック集団の人々（ウリアンハイ、ドゥルベッド、トゥバなど）が団結するようになってきた。別々に活動していた各エスニック集団の団体が合体し、2005年4月、「トゥバ、ウリアンハイ連盟」が設立されたのである。同年5月25日に、バヤンウルギー県で、全ヤスタン（エスニック集団）民族会が開かれるなど、「トゥバ、ウリアンハイ連盟」による活動が活発化している。さらに、2007年5月に「アルタイ・ウリアンハイ・フェスティバル」が開催予定であるという。この連盟の一つの大きな目的は、バヤンウルギー県におけるモンゴル系エスニック集団の人々の生活支援、社会的保証、伝統文化の保護であるという。カザフ人がイスラームを信仰しているのに対し、モンゴル系諸エスニック集団はチベット仏教を信仰していることも、団結の背景にあるだろう。

一方、「ナウルズ」「イヌワシ・フェスティバル」の際に見られるように、カザフ人とそれ以外のエスニック集団との文化的交流もバヤンウルギー県の祝祭の一つの要素でもある。記念祭典・パレードには、カザフ人とモンゴル系エスニック集団の人々が一緒に登場したり、カザフ人がチンギス・ハーン時代を

再現し演技したり、また、カザフの伝統競技とともにウリアンハイ人の弓矢が登場したりする。

つまり、二つの儀礼には、民族・文化アイデンティティの再確認、伝統文化の再評価・継承、カザフ社会の統合など、文化的側面があると同時に、一方では、国民国家の一員であることを表明するために国家への敬意を表すという側面もある。また、バヤンウルギー県内の「マイノリティの中のマイノリティ」であるモンゴル系諸エスニック集団への配慮もうかがわれる。

グローバライゼーションの波がモンゴルにも及んでいる現在、そのカザフ社会は、市場経済化、移住、国家及び他のエスニック集団との関係、ナショナリズム、観光開発、伝統文化の維持・継承といったさまざまな社会的文化的問題に直面している。カザフ独自のエスニックな位置付けとして、①モンゴル国家及びマイノリティとしてのモンゴル人との関係、②バヤンウルギー県内におけるモンゴル系諸エスニック集団に対してはマジョリティという立場、③カザフスタンというカザフ人の国とモンゴル国との関係、④カザフスタンとの相互交流、など多様な関係性が存在する。モンゴルのカザフ社会は、モンゴル国の民主化と市場経済化、カザフスタンへの移住など激動の中にあり、複雑なエスニック関係の枠組みの中で、伝統文化の活性化を志向して社会を再編しつつあるといえよう。

以上、本稿では、国家儀礼とエスニック集団の伝統儀礼を取り上げながら、ポスト社会主義モンゴル国における伝統の復活、とりわけ、カザフ社会の再編をエスニシティ問題に関連づけて検討した。今後、イスラームの復興運動やカザフスタンとの関連を視野に入れ、これらの問題をさらに追及していきたい。

**参考文献**

Badamhatan, S.

1980（1973）"BNMAU-iin Undestnii ba Ugsaatnii hugjliin asuudald"（モンゴル人民共和国におけるウンデステンとオグサータンの発展に関する諸問），Tuuhiin sudlal, pp.17-21.

バトトルガ・スヘーギーン

2002（共著）「モンゴル西部の少数民族カザフ社会をめぐる国際関係と国家の政策」『リトルワールド研究報告』第18号，27 - 48項

2003「モンゴルのマイノリティ「カザフ」社会の現状と変化—モンゴルの市場経済化とカザフスタンへの移住—」『愛知県立大学国際文化研究科論集』第4号，109 - 131項

2004「社会変動と移民社会の現状—カザフスタンにおけるモンゴル系カザフ人を中心に—」『愛知県立大学国際文化研究科論集』第5号，111 - 126項

Chuluunbaatar, S.　Onjoon, Sh.

1990 "Uuguul nutgiin urainghaichuud haichiv?"（本来のノタッグ（故郷）のウラインハイたちはどこ？）*Hudulmur* 4月24日，№46

藤井麻湖

1998「モンゴル国におけるエスニシティ」，小長谷有紀編『草原の遊牧文明』，117.

Islam, H.

2000 "Undestnii hugjliin tuviig demjeeguid Kazakhuud setgel dunduur baina"（民族発展センターの設立を応援してくれなかったことに，カザフたちは不満を持つ）"Mongoliin Medee（モンゴル・ニュース）" №026（521）

モンゴル科学アカデミー（二木博史他訳）

1988『モンゴル史』全2巻，恒文社

Nyambuu, H.

1992『Mongoliin ugsaatnii zuin Udirtgal』（モンゴル民族学概要），61，Ulaanbaatar.

リケット，ロバート

1999「新疆ウイグル自治区のモンゴル人社会—「改革・開放」下の民族関係—」（和光大学モンゴル学術調査団『変容するモンゴル世界—国境にまたがる民』197-248，新幹社

ルハグヴァスレン・イチンホローギーン

2000「カザフ人の正月」『季刊民族学』91：28 - 29

田中克彦

2000「カザフ人の過去と未来」『季刊民族学』91：34-42.

Tserenhand, G.

2005 "BNMAU-iin Ugsaatnii bureldehuun"（モンゴル人民共和国民族構成）*Mongolchuud:Ugsaa-Soyol,zan zanshil* 2, 11-14, Ulaanbaatar.

山下晋司

1997「儀礼と国家—インドネシア独立50周年記念事業から—」青木保（他）『儀礼

とパフォーマンス』（岩波講座文化人類学　第9巻）209 - 238，岩波書店

**参考資料**

Bayan-Ulgii　aimag（バヤンウルギー県）

2001　*Statistikiin medee*.（バヤンウルギー県統計）

上村明

2000「モンゴル国西部の英雄叙事詩の語りと芸能政策」民族博物館

（http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/kamimura/articles/ace_japan.html）

Kazakh Undestnii Ev Negdliin Hudulguun（カザフ民族友好連盟）

1990 "Mongoliin ard tumend ilgeeh zahidal"（モンゴルの人民に送る手紙），3月20日，No01，ウルギー市